

鼻 中 隔 膿 瘍 の 1 症 例

川崎医科大学 耳鼻咽喉科

半田 徹, 山本 英一, 中川のぶ子
佐藤 幸弘, 秋定 健, 折田 洋造

(昭和62年6月23日受理)

A Case of Nasal Septal Abscess

Tohru Handa, Hidekazu Yamamoto
Nobuko Nakagawa, Yukihiro Sato
Takeshi Akisada and Yoza Orita

Department of Otorhinolaryngology
Kawasaki Medical School

(Accepted on June 23, 1987)

われわれは外傷後両側鼻閉と鼻漏を呈したため近医ではアレルギー性鼻炎として治療を受けていた13歳の男子中学生で、鼻中隔血腫が膿瘍化し軽度の鞍鼻を呈した症例を経験した。鼻中隔膿瘍の報告は1914年から1985年までに90例を数え本例を加えて若干の統計的考察を加えた。

A 13-year-old boy was admitted to the hospital because of traumatic nasal septal hematoma. His condition had been treated as a nasal allergy because of nasal obstruction and rhinorrhea. Nine weeks after injury, surgery was performed. As septal cartilage had been destroyed by infection, he had a mild saddle nose. Ninety cases of nasal septal abscess reported in Japanese literature from 1914 to 1985 are also reviewed.

Key Words ① Nasal septum ② Abscess ③ Nasal allergy ④ Saddle nose
⑤ Statistical observation

I. はじめに

鼻中隔膿瘍は比較的まれな疾患であるが早期診断と適切な処置がなされないと鞍鼻を呈したり、時には頭蓋内波及や敗血症といった重篤な感染症へと進行し死に至ることもある。今回われわれは外傷後両側鼻閉と鼻漏を呈したためにアレルギー性鼻炎として治療を受けていた鼻中隔血腫が、長期にわたる経過により膿瘍化し軽度の鞍鼻を呈した症例を経験した。本邦では久保(1914年)の報告以来1985年までに90例の報

告がある。本例を加えた91例の統計的考察を行う。

II. 症 例

症 例: 13歳, 男子中学生

主 訴: 鼻閉, 鼻漏

既往歴, 家族歴: 特記すべきことなし

現病歴: 昭和62年1月20日, サッカー中へヘディングをしようとした友人の頭が鼻尖部に下方から当たり受傷。鼻出血を認めたがすぐに止

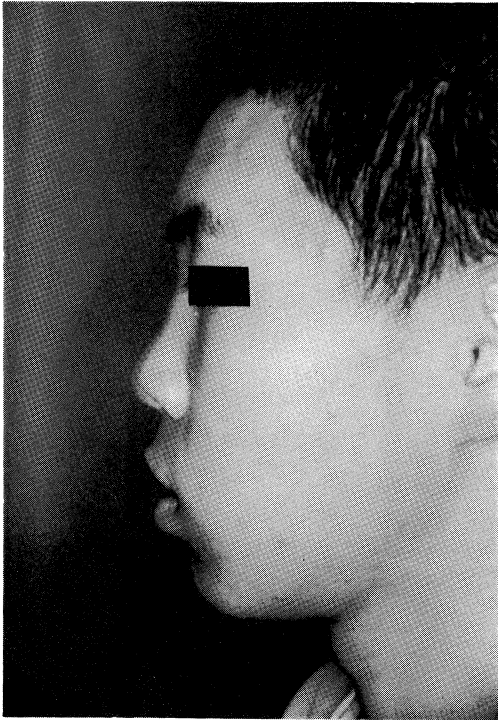


Fig. 1. Lateral view of the face. His nose is showing mild saddle nose.

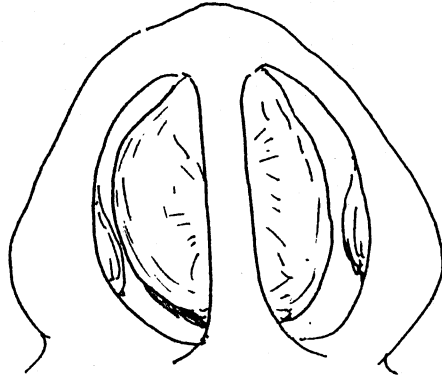


Fig. 3. Illustration of Fig. 2.

血し鼻部の痛みのみが持続していた。1月28日になり少量の血性の鼻汁と発熱、咳嗽が出現し両側鼻閉を来すようになった。2月21日より近医にてアレルギー性鼻炎として治療を受けるが症状軽快せず左頬部の腫脹が出現してきたた

め、抗生剤の内服と筋注を施行しいったん症状の軽快を認めた。病歴の再聴取により鼻部打撲の既往が判明したため鼻中隔の腫脹と鼻閉の改善を目的として3月7日、当科へ紹介来院となった。

来院時所見：鼻背部は段差を呈し押すと容易に陥凹し軽い鞍鼻の状態であった（Fig. 1）。鼻腔内は両側に充血し腫大した鼻中隔が下鼻甲介を外側に圧排し下鼻甲介は認めることができなかった（Figs. 2, 3）。

入院時検査：赤血球数 $436 \times 10^4 / \mu\text{l}$ 、血色素 $13.1 / \mu\text{l}$ 、白血球数 $5600 / \mu\text{l}$ 、N. Band 3%、N. Seg 42%、血清スクリーニング、血清電解質、尿検査は異常なし。血沈 $22 \text{ mm} / 1\text{h}$ 、梅毒反応陰性、B型肝炎ウィルス抗原陰性。

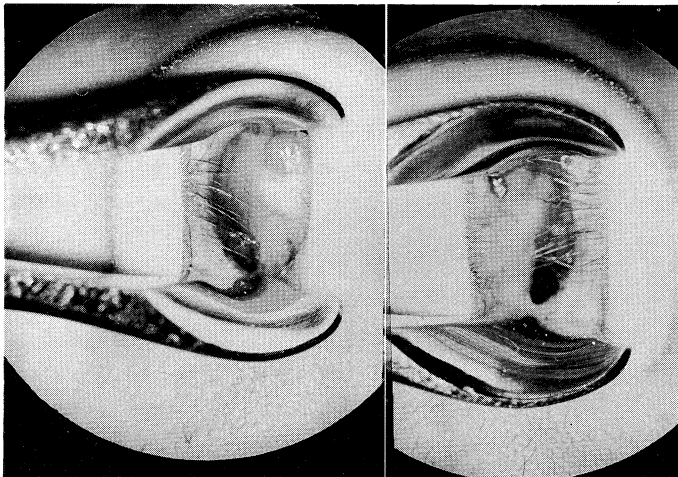


Fig. 2. Preoperative finding. Nasal airway is obstructed by swollen nasal septum.

副鼻腔トモグラム：鼻中隔の腫大と左上顎洞、左前頭洞に高濃度陰影を認めた。

CT：鼻中隔の腫大を認めたが鼻中隔軟骨陰影は認められなかった。左上顎洞は低濃度陰影を呈した（Fig. 4）。

入院後経過：左上顎洞および鼻中隔には凝血塊が存在するものと考え3月31日、全身麻酔下に左上顎洞および鼻中隔血腫除去術を施行した。手術所見としては左上顎洞内は凝血塊や新鮮

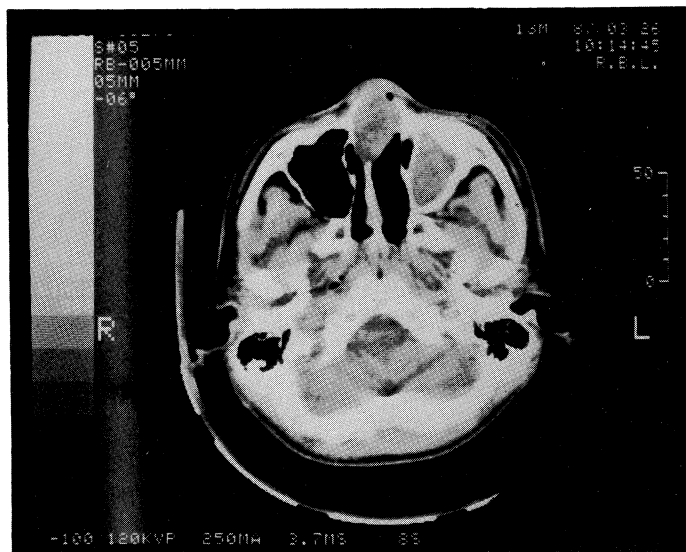


Fig. 4. Computed tomogram of the nose. Showing swollen nasal septum and left maxillary abnormal shadow. Nasal septal cartilage can not be seen.

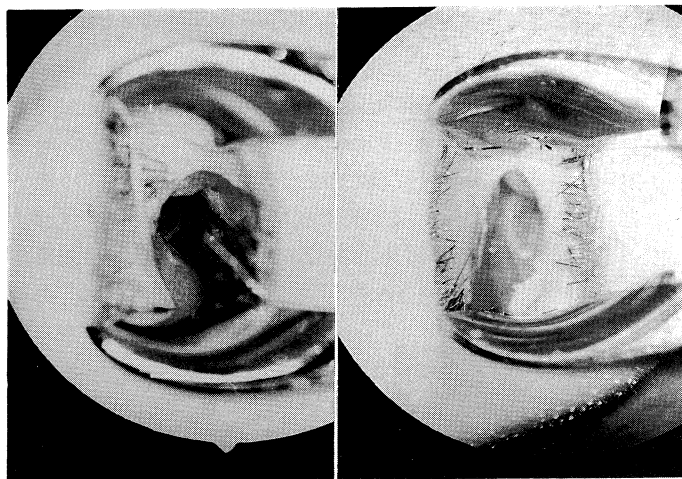


Fig. 5. Postoperative finding. Bilateral inferior nasal conchae can be seen.

血および粘膜の肥厚を認め、前壁と後壁の一部に骨折線らしき段差を認め出血源であると思われた。鼻中隔の左側の前方を切開すると膿汁様の粘稠な液体が流出し感染が存在していたことが疑われた。鼻中隔軟骨は認めることができず炎症によって融解したものと考えられた。両側鼻腔内にガーゼタンポンを挿入し鼻粘膜を圧迫により癒着させるようにした。術後4日目にタ

ンポン抜去を行い、抜去後は両側の下鼻甲介も明視でき鼻呼吸も可能になった (Fig. 5)。外見上は軽度の鞍鼻を呈したが炎症が鎮静化した上で矯正を行うこととし術後10日目に退院となった。

III. 考 察

鼻中隔膿瘍は比較的まれな疾患ではあるが、常にその疾患の存在を念頭に置いた診療が必要である。特発性のもや近接部位よりの炎症の波及、そして外傷の既往歴を聴取できなかったときなどは発熱、鼻閉、鼻漏といった感冒様症状で発症することが多いため副鼻腔炎、アレルギー性鼻炎などと誤診しやすい。本症もアレルギー性鼻炎として加療を受けており経過中に左頬部腫脹が出現してきたことで外傷の既往が聴取されるに至ったため来院までに6週間を経過していた。その間に鼻中隔血腫が感染を来し膿瘍化してしまったと考えられた。本邦では久保ら¹⁾(1914年)の報告以来われわれが渉猟し得た範囲では1985年までに90例²⁾の報告を認め、われわれの1例を加えた91例について統計学的に観察する。

1. 原因別分類

上村ら³⁾の分類に従うと Table 1 のごとく外傷性が34例、炎症性が24例、特発性が33例となった。外傷性(狭義)の場合は頻度については飯田ら⁴⁾は23例中3例、清沢⁵⁾は57例中1例に認められたと報告しており、1週間以内の来院が多いため頻度が低いのであろうと思われる。外傷性の中で注意を要するものとしては

鼻中隔手術後の合併症が6例あり、うち1例⁶⁾は隆鼻術の術後に敗血症様症状で死に至っている。近隣部位よりの炎症波及には慢性歯根膜炎、歯齦炎、歯齦膿瘍などの歯牙疾患^{7)~10)}のほかには中耳炎、扁桃炎、鼻癬、頭癬、急性副鼻腔炎、鼻前庭湿疹などが報告されている。

2. 年齢, 性別

Table 2 に示すように外傷性の場合には10~29歳の男性に多く、非外傷性は年齢, 性別が均等に分布している状態で興味深く思われる。

Table 1. Cause

種 類		例数	計
外 傷 性	外 傷 (狭義)	26	34
	鼻中隔手術後	6	
	不 明	2	
近接部位よりの炎症波及	歯 牙 疾 患	9	24
	その他の疾患	15	
特 発 性 (原因不明)		33	33

Table 2. Age and Sex

	外 傷 性		非 外 傷 性		計
	♂	♀	♂	♀	
10歳未満	1	2	7	5	15
10~19歳	11	1	8	5	25
20~29歳	10	2	7	4	23
30~39歳	2	1	5	2	10
40歳以上	2	0	6	4	12
不 詳	2		4		6
計	26 (2) 6		33 (4) 20		91例

() 内は不詳例

3. 症 状

鼻背部腫脹, 発赤, 疼痛, 鼻閉, 鼻漏, 発熱が主で, 外傷性の場合には鼻出血を併発している。片側のみの腫脹の記載は5例に認められた。

4. 細菌学的検査

山田ら²⁾の報告によると検査の行われた54例中42%にブドウ球菌を認め, ついで肺炎球菌が20%, 連鎖球菌が11%となっている。

5. 治 療

本疾患は受診時の局所所見からただちに診断することが必要で膿瘍の場合は穿刺, 切開にて排膿を行い, できれば細菌培養を行い十分な抗生剤の投与が望ましい。

6. 予 後

本疾患の予後は膿瘍の切開, 排膿, ドレナージにより一般に良好とされているが, 山田ら²⁾によると鼻中隔軟骨穿孔を来した例が46%と高率で鞍鼻を含め外鼻の変形を来した例が30%となっている。重篤な合併症として6例の髄膜炎¹¹⁾があり, うち3例^{12)~14)}が死亡している。髄膜炎の感染経路としては血行性, リンパ行性, 直接波及がある。¹⁵⁾ いわゆる面疔と同様に顔面正中の感染巣には注意を要する。

IV. 結 語

13歳の男子中学生で外傷性鼻中隔膿瘍を来した1症例を経験し, 本邦における報告例より若干の統計的観察を加え報告した。

なお, 本論文の要旨は第13回日本耳鼻咽喉科学会中国地方部会連合会(1987年6月14日)において発表した。

文 献

- 1) 久保猪之吉, 高橋文雄: 特発性鼻中隔膿瘍. 実験医報 3: 29-34, 1914
- 2) 山田一美, 瀧本 勲, 稲福 繁, 江夏 努, 川出博彦, 原 誠彦: 鼻中隔膿瘍の1例. 耳鼻臨床 78: 1302-1307, 1985
- 3) 上村卓也, 藤巻龍枝, 岸 澄子: 特発性鼻中隔膿瘍の1例. 耳喉 40: 613-617, 1968
- 4) 飯田 収, 宇野昭二: 外傷性外鼻鼻中隔奇形に就て. 耳喉 27: 427-431, 1954
- 5) 清沢 博: 鼻中隔膿瘍を伴った外傷性斜鼻の1症例. 日耳鼻 66: 92, 1963

- 6) 河井紀子, 鈴木政昭: 不幸な転帰をとった鼻中隔膿瘍の一部検例. 日耳鼻 74:119, 1971
- 7) 村上正徳: 歯性鼻中隔膿瘍. 耳鼻臨床 25:112—118, 1931
- 8) 大森重次: 歯性鼻中隔膿瘍. 大日耳鼻 40:203, 1934
- 9) 劉 守治: 歯性鼻中隔膿の1例. 大日耳鼻 48:233, 1942
- 10) 加来康寛: 歯性鼻中隔膿瘍に就て. 耳喉 15:319—324, 1942
- 11) 調 賢哉, 上村達郎: Deviotomie 後に起った化膿性髄膜炎の1症例. 日耳鼻 63:2412, 1960
- 12) 小林正平: 特発性鼻中隔膿瘍に起因する脳膜炎の一例. 大日耳鼻 41:1085, 1935
- 13) 渡辺 孝: 特発性鼻中隔膿瘍に継発せる脳膜炎一症例. 耳喉 13:22—27, 1940
- 14) 田中 弘: 特発性鼻中隔膿瘍に併発した鼻性頭蓋内合併症例(剖検例). 日耳鼻 67:194, 1964
- 15) 馬場駿吉: 視神経炎, 翼口蓋窩, 頭蓋内合併症(鼻). 耳喉 52:747—750, 1980